

百分の三の思い出

高7期 降幡俊夫



学校はスタートして百年、その間在学したのは三年。単に数字だけでは、取るに足らない比較になる。しかし、その中身を改めて振り返るとその何倍もの重みを覚える。

私の緑高への入学は1952年（昭和27年）。世の中は、まだ戦争の清算が済まず、学校の運動場も、進駐軍の蒲鉾兵舎に占拠されていた。

運動場が使えないので、体力を持て余している私たちは、休み時間になると校舎の横の空地で相撲を取ったが、ある日親友の古川和郎君から「柔道をやらないか」と誘われた。中学生の頃高校生達の柔道に憧れていた私は即座に賛成したが、学校には柔道場がない、聞くところによると占領軍のお達しで学校での柔剣道を公式にやるのは認められていない、とのこと。

仕方なく日の出町にあった英（はなぶさ）太郎氏の町道場に通うことになった。その内に山手警察や伊勢佐木警察の道場を使ってよろしいということになり、警察の皆さんと稽古をした。横浜は国際港があるだけに外国人の愛好家も寄港の折、話の種に寄ってくれ、彼らとも稽古した。時にはプロレスへ転向するという遠藤幸吉なども現れ、随分投げ飛ばされたものだ。



その内、世の中も徐々に変わり、高校での柔剣道が認められるようになり、上級の三年生達が柔道部を作り、誘われたが、受験勉強に追われ、名前だけの部員になってしまった。

今にして思えば、在学した三年間は、随所で日本の本格的復興の狼煙が上がった時期のようにも思われる。

略歴

1960年早大卒、日本経済新聞社入社、米国駐在などを経て、日経マグロウヒル社（BP社）で日経パソコン、日経エレクトロニクス、日経メカニカル、などの発行人、専務として日経BP社アメリカ社長、日経BPヨーロッパ社社長など兼務。現在磯子カンツリー理事。趣味は絵画制作。

